

海外舞踊学文献紹介 (ロシア)

村山久美子

旧ソ連が崩壊してまもなく20年になろうとしている現在、かつてのような国家の出版コントロールがなくなり、民間の出版社が数多く現れていることは今さら言うまでもないが、このことによって、各出版社の特徴が出ている多様な書籍が舞踊芸術関連のものにも現れているのは興味深い。バレエ大国であり多くの人々がダンスを愛しているロシアでは、ソ連時代から、舞踊芸術に関する出版物は、専門書、入門書、写真集等々数多かつた。芸術よりビジネス重視の現在でもそれは同様であり、日本ではあまり多いとは言えない舞踊芸術関連書籍のペーパーバックも数多く、その一方で、装丁に凝ったり贅沢に写真を使ったりした大型の豪華本も、年に何冊も出版されている。

内容的な面での近年の傾向は、まず、ソ連時代には少なかった、欧米の研究者のロシア語訳が続々出ていること。とくに、ソ連崩壊直後、欧米に資料が多いバレエ・リュス関連の書籍の翻訳が目立った。

だが近年は、バレエ・リュスに関しては、翻訳以外に、外国では発表されていない国内の貴重な資料を使った書籍が出てきているのが興味深い。そのような書籍のなかで特筆したいのが次の本。

1. История «Русского балета», реальная и фантастическая в мемуарах из архива Михаила Ларионова, Издательская программа «Интерросса», Москва, 2009. 大判, 432 c. (ラリオノフ・アーカイヴのメモワールによる現実と空想の『ロシア・バレエ』史, 出版計画「インテルロッサ」モスクワ 2009年 大判 p432)

この本を出版するきっかけとなったのは、バレエ・リュスの美術制作に深く携わっていた ミハイル・ラリオノフ (1881-1964) の2番目の妻アレクサンドラ・トミリナ (1879-1987) が、ラリオノフと最初の妻ナターリヤ・ゴンチャロワ (1881-1962) の大量の遺品を、モスクワの美術館、国立トレチャコフ・ギャラリーに、1989年に寄贈し、近年、その遺品の整理が始められたことである。遺品には、ラリオノフの自身の作品が最も多い。自身の絵画やリトグラフ、舞台衣裳のデザイン画やセットの模型、書籍、書簡、写真、彼が美術を担当した舞台の初演の批評等々があり、

さらに、ゴンチャロワや友人たちの作品も含まれている。これらは、革命直後の1920年代の「美術館に革命を起こした」と言われた時代の、貴重な作品群、資料である。もちろん、彼の仕事が最も密接に結びついていた、バレエに関するものが圧倒的に多い。総数一万数千点におよぶ、膨大なアーカイブである。今回取り上げた書籍は、このアーカイブを紹介する第一弾として出版されたものであり、まだ、アーカイブの一部にすぎないという。今後、資料の整理をさらに進めつつ、刊行が続けられる予定である。

含まれている内容は、ラリオノフの遺品がトレチャコフ・ギャラリーに入ることになったいきさつや、1920年代のロシア・アヴァンギャルドのダンスについての著書などで有名なE. スーリツの、バレエ・リュスとそれ以後のモンテ＝カルロ・バレエ・リュスほかについての読み応えのある論文などに続いて、註釈を付けられたラリオノフの手紙や草稿、写真や舞台美術のデッサン、バレエ・リュスのメンバーの日常の姿のスケッチ、そして、詳しい索引という構成になっている。豊富にある大判の写真が強いインパクトをもっていることと、デッサンページの紙質が、本当に作品に触れているようなリアルな感触であることが、大きな魅力である。

分野を問わずソ連時代に国内で十分に研究が行われておらず、ソ連崩壊後に一気に研究が進み資料が発掘されたものに、貴族階級が栄華を極めた18世紀研究と、ロシア革命直後のさまざまな芸術の実験の時代、ロシア・アヴァンギャルドの研究がある。後者は演劇の演出家マイエルホリドが活動した時代であるため、世界中の感心が高く、外国での出版も多い。このような領域で、今年、舞踊芸術の貴重な書籍が、イタリア人の研究者の執筆により、ロシアでロシア語で出版された。

2. Николлета Мислер, Вначале было тело. Искусство – XXI век, Москва, 2011. 大判 447 c. (ニコレッタ・ミスレル, 初めに身体ありき, イスクーストヴォー XXI ヴェーク, モスクワ. 大判 p447)

著者ミスレルは、ナポリ東洋大学の教授であり、カンディンスキー、マレーヴィチ、フィロノフ、フロレンスキーなどを主軸とした、ソビエト時代1920～30年代の研究者である。ミスレルは、1999年と2000年に、ローマとモスクワで、ロシアの1920年代に様々な小劇場で行われた身体のムーブメントの研究、実験に関する展覧会を、ロシア国内に眠る資料も駆使してオーガナイズした。ローマの「ローマ・アクヴァリウム」での展覧会は、『初

めに身体ありき』と名付けられ、翌年のモスクワのバフルーシン演劇博物館で行われた展覧会は、『踊る (пластический) 人間』と題されていた。

ローマの展覧会の題名から想像がつく通り、取り上げたこの書籍は、ミスレルがオーガナイズした展覧会の大量の貴重な展示物を紹介しつつ、ロシア・アヴァンギャルド時代のロシアのダンスのモダニズムを分析するものである。

興味深いのは、ミスレルが美術の分野の研究者であるため、舞踊学ではあまり注目されていなかった、1920年代のロシア・アヴァンギャルド芸術の推進機関ロシア芸科学アカデミー（1923年にРАХНとして発足し、1925年から国立ロシア芸科学アカデミー ГАХН となって1929年まで存続）の舞踊芸術研究所の身体ムーヴメントの探索を、この時代の身体表現の探索の主軸に置いていることである。その探索の関連として、舞踊学ではこの時代もっとも注目されているカシヤン・ゴレイゾフスキー（1892-1970）やレフ・ルキン（1892-1961）等々の創作が述べられている。芸術学者アレクサンドル・ラリオノフ（1889-1954）とアレクセイ・シードロフ（1891-1978）、画家オトン・エンゲリス（1880-194?）が中心となって、新しい絵画のモチーフとして身体ムーヴメントの探索を行ったこの舞踊芸術研究所については、舞踊学の分野ではほとんど研究されていなかった。

この本は、ГАХНの舞踊芸術研究所が1925年から1928年の間毎年開催した、探索の成果を発表する4つの展覧会『ムーヴメント芸術』の内容の著述を中心にして、同時代の舞踊芸術の様々な探索をまとめる試みである。

多くのロシアの芸術学研究者などの協力を得て展覧会を行った絵画や写真ほかの資料は、これまであまり目にする事がなかったものも多く、詳しい研究が行われていなかったアヴァンギャルドのダンス・カンパニーについての記述もある。膨大な資料を扱っているため個々の現象に対する深い分析を行ってはいないとはいえ、資料として貴重な本である。

現在のロシアの舞踊学に関する研究の出版のもう一つの傾向として、ソ連時代に社会主義リアリズム芸術の理念にそぐわないとして十分な活動ができなかった鬼才振付家の作品を、正当に評価分析する試みがある。その試みは、実際の舞台での作品復元と、同時進行で行われている。アヴァンギャルド時代に優れた探索を行ったフォードル・ロプホーフ（1886-1973）、カシヤン・ゴレイゾフスキー、そのやや後のスターリン時代に創作の円熟期を迎えたレオニード・ヤコブソン（1904-1975）についての研究、再評価である。書籍となった最も新しいものが、以下のヤコブソンに

関する資料。

3. Театр Леонид Якобсон, Лики России, Санкт-Петербург, 2010. 200с. (レオニード・ヤコブソンの劇場, リキ・ロックスイイ, サンクト=ペテルブルグ, 2010年. p200)

稀に見る身体ムーヴメントの造形のセンス、高い音楽性をもつヤコブソンの作品は、ウラーノワ、プリセツカヤ、マカロワ、バリシニコフといった20世紀ロシアの最高峰に位置づけられる名舞踊手たちがそろって魅了されて踊り、モイセイエフ、エイフマンといったロシアを代表する才能あふれる振付家たちが崇敬してきた。にもかかわらず、肉体の美しさを生かす自由な発想の創作を行い、社会主義ソ連のプロパガンダとなる作品を創らなかったことや、ユダヤ人であること（ソ連社会には根強い反ユダヤ感情があった）のために、ヤコブソンは、マリインスキー劇場やボリショイ劇場で、上演禁止などの様々な制約をしばしば受けていた。そこで彼は、苦勞して自らのカンパニー「テアトル・ミニアチュール」の結成にこぎ着け、自作を発表していった。そのカンパニーが、現在の国立サンクト=ペテルブルグ・アカデミー劇場である。

このヤコブソンに関する研究書のこれまでと大きく異なる点は、ヤコブソンと直接深くかかわって創作活動を行ったり親密に交際した人々の回想が中心になっているため、ヤコブソンの創作の姿や人柄が、リアルに浮かび上がってくることである。一昨年マリインスキー劇場で行われたショスタコーヴィチ・フェスティバルで、ヤコブソンのバレエ『南京虫』を初めて見たときには、ほかの振付家の音楽の理解よりはるか高みにあるその音楽性、動きの造形能力、ユーモアのセンスに目を見張ったが、彼の作品と重ね合わせながらこの本の様々な人々の回想を読むと、その才能の大きさが如実に感じられ、なぜこれほどの才能が、ソ連時代公的に認められていなかったのかと、胸が苦しくなってくる。